

日本国際理解教育学会会報

JAPAN ASSOCIATION FOR INTERNATIONAL EDUCATION NEWSLETTER

Vol. 14 平成10年度 No.2 平成11年3月9日 編集発行：日本国際理解教育学会事務局
〒161-8539 東京都新宿区中落合4-31-1 目白学園女子短期大学内 TEL & FAX：03-5983-8132

■目次■

国際理解教育学会第9回大会のお知らせ
実践研究会報告
アジア太平洋地域国際理解教育会議報告
各委員会報告
理事会・常任理事会報告
寄贈文献・図書
お知らせ
事務局からの連絡

国際理解教育学会第9回大会のお知らせ

第9回大会準備委員長：星村 平和（帝京大学）

既に会員の皆様には、1月11日（月）付でご案内しましたように、第9回大会を帝京大学八王子キャンパスで開催致します。自由研究発表は例年通りですが、シンポジウムと課題別討論会に特色を持たせました。

ご案内にもありますように、シンポジウムは公開とし、「新学習指導要領の〈国際化〉の視点をどう受けとめ、どう生かすか」というテーマのもとに、文部省の立場と小・中・高校での受け止め方を出し合い、実践の方途を探ることと致しました。テーマについては、学会として現場に寄りすぎているのではないかとのご意見もあろうかと思えます。しかし、会員の大多数が学校現場の実践者で占められており、しかも「総合的な学習」という21世紀型カリキュラムが現場の当面する課題である以上、学会としてこの問題に対応することは避けられないと考えた次第です。準備委員会としては、会員以外の教育関係機関にも案内状を送付致しましたが、会員の皆様方からも、広く参加を呼びかけて頂きたいと存じます。

また、例年の課題別討論会は、「特定課題研究」と性格を変え、「国際理解教育の基本概念」を継続的に研究していくことと致しました。目下研究委員会を中心に本大会でのテーマを検討中ですが、「新しい国際状況の中での〈国〉又は〈国民国家〉の扱い方」等が候補に挙がっています。ご期待下さい。

6月はうっとうしい季節ですが、なるべく良い環境で大会が開催出来ますよう準備を進めております。

多数の会員のご参加をお待ちしています。

1. 期日： 平成11年6月12日（土）・13日（日） 両日共午前10時より開始
2. 場所： 帝京大学八王子キャンパス
連絡先： 〒192-0395 東京都八王子市大塚359
電話：0426-78-3628 FAX：0426-76-0388
3. 内容： 6月12日（土）
午前 自由研究発表
午後 特定課題研究
総会・懇親会
6月13日（日）
午前 自由研究発表
午後 公開シンポジウム

実践研究委員会委員長：多田 孝志（目白学園中・高等学校）

1998年度の実践研究会は、11月11日（火）島根県国際理解教育研究会との共催で松江市の本庄小学校に於いて開催されました。

今回の実践研究会は、国際理解教育の理論・実践研究者が数多く参集している本学会の特質を生かし、実際の学習活動をさまざまな立場の人々が共に参観し、多様な角度から協議を深めることにより、国際理解教育の実践の課題や向かうべき方向を明らかにしていくことを意図して開催されました。

参加者の多少が危惧されました。しかし、当日は、合計500名の参加者を得ることができました。参加者は、現場教師、大学教員に加え、関連機関職員、大学院生、学生、出版・報道関係者など多彩であり、また北海道・大阪・東京・広島などからの参加もあり、この教育での各界の関心の高さが窺えました。

実践研究会では、午前中には公開授業と開会式、基調講演が行われました。午後からは各教室や体育館を会場にして公開された授業実践を検討する会、体育館での実践討論会がもたれ、閉会式でこの研究会を終了しました。それぞれの概要を記します。

公開活動

○ 音楽集会

全校生徒が体育館で、「広がれ歌声の和」をテーマに音楽集会を行ないました。司会進行、合唱曲の説明等々は全て子どもたちが行ないました。子どもを前面に出し、大勢の参加者の前で語る経験をさせようとする配慮がされていました。伸びやかで澄んだ歌声に、参加者一同は引き込まれるように聞き入っていました。当地に滞在する外国の人々との合唱、参会者との歌いながらの交流等々、単なる合唱発表会でなく、国際理解教育の実践としての教師側の目的意識が伝わってきました。

○ 公開授業

「ふるさと大好き、世界にはばたけ！本庄っ子」をテーマに6つの授業が公開されました。

低学年の「なかよし秋祭り」は、校庭に落ちている木の葉やどんぐりなどで工作をしたり、ゲームを創造し、参会者と共に楽しむ活動でした。中学年「わたしたちのかぼちゃまつり」では、自分たちで栽培した南瓜を収穫し、それを材料として料理を作ったり、AETの先生の指導をうけハローウィンを楽しんでいました。自然の素晴らしさを感じたり、長期の共同体験学習により仲間のことのよさを実感させる活動でした。

高学年を中心にしたクラブ活動の発表も公開されました。「本庄の湖での発見・発表会」では、本庄小の裏庭が湖岸となっている中海の生物を採集・飼育・観察することを通して気づいた、生物相互の関連や、自然と人間生活の関わりについての報告がされました。「本庄の町の案内板づくり」では、地域の文化財、歴史などについて地域を探訪し、地域の人々に取材して、町の案内板を制作しました。外国人にも役立つよう絵や写真を使用し、また簡単な英語の案内文もつけました。

「きな粉をいっしょに作りましょう。」は地域のお年寄りをお招きし、お年寄りたちから石臼の引き方を教えて頂き、またその活動の中で自分を語ったり、お年寄りの言うことをよく聞き取りし、コミュニケーション能力を高めていく学習でした。石臼でひいた黄粉で餅を参会者と一緒を食べたり、またインドの方をお招きしカレー粉づくりを実習し、それで調理したカレーを試食する活動も行なわれ、生活文化を通じての国際理解を進めていました。

この他、個性と表現を重視した「手作りミュージカル」、友達や参加者と楽しさを共感させる「汗を流そう」、協働と創造をキャッチフレーズにし「心をつなぐTシャツづくり」などの多彩な活動が公開されました。

どの実践にも、異文化共生社会の到来を直視し、地球環境への関心の高まりや文化理解などを視野に入れつつ、背伸びせず、子どもたちの生活や住む地域に立った地道な学習により、一人一人に地球時代に対応した資質・能力・態度を育ませようとする本庄小学校の教職員の方針が感じとれました。

全体会

1. 開会の挨拶

まず開会の挨拶があり、中西晃本学会副会長が日本国際理解教育学会を代表して、実践研究会を開催するにあたり、島根県国際理解教育研究会および松江市立本庄小学校のご協力を頂いたことへの謝辞が述べられました。また中西副会長は、挨拶の中で今回の実際の学習活動を中心とした実践研究会が、今後の国際理解教育の課題や方向を明らかにしていくのにきわめて貴重な機会であると、実践研究会の意義を強調されました。

ついで島根県国際理解教育研究会の高橋英二会長が、島根県の国際理解教育研究の状況を報告し、また島根で実践研究会が開かれることについての学会への謝辞を述べられました。

2. 基調講演

基調講演には教育関係者のみならず、PTAや地元の人々が多数参加されました。帝塚山学院大学国際理解研究所長米田伸次先生による講演の骨子をまとめてみます。

国際理解教育の実践と理論の統一をめざして国際理解教育学会が設立された。この学会の希求するものは地球時代の教育の方向を明らかにすることである。

国際理解教育のひとつの方向として、地域から世界に向かう教育があるが、無理やり世界につなげるということでなく、まず教師が「どんな子どもに育てたいか」を語り合い、地域のニーズをふまえてイメージ（ロマン・目標）を共有していかなければならない。

今次の中教審答申は新しい国際理解教育のテーマとして「共生」を掲げている。この共に生きることの基盤には、多文化教育や人権教育に関わるもの、すなわち違いを寛容の心で認め尊重する精神でなければならない。また他者を理解するためには自己理解・自己確立が必要であり、それこそが共生の基礎である。

ところが現代の若者を見ると、自己が確立されていないためにコミュニケーションできない、人間関係に苦手意識をもつ等の傾向があり、総じて自尊感情が育っていない。この理由には教師をはじめとする大人たちによるマイナスパワー（「らしくなりなさい」との偏見、比較や競争、支配による抑圧）が作用しているのではないかと。子どもたちに自尊感情を育むためにはプラスパワー（信頼、共感、経験）により、子どもをまるごと認める姿勢が教師や大人に必要と考える。

マザーテレサは「愛の反対は無関心である」と述べ、苦しんでいる人々に手を差し伸べた。子どもたちを丸ごと一人の人間として認める「まなざし」こそが教育の場に大切である。また心揺さぶるような触れ合いの中から、子どもは自分の中の可能性に自信をもち、仲間の良さを発見していく。

学び手の心を耕すことを忘れて、私たちはともすると、子どもたちを十把一からげに捉えてはいないだろうか。一人一人の子どもたちを認める「まなざし」をもち、社会に必要な自己を自覚させ、エンパワメント（自己の内なる力を芽吹かせていく）させていき、様々な立場の人々と触れ合い、人と人とのつながりの素晴らしさを体感させる。こうしたことを通してこそ国際性は培われていくと考える。

3. 実践検討会

実践検討会では、5つの分科会に別れて実践公開の先生を中心に「井戸端」的な雰囲気の中で話し合いが行なわれました。ここでは公開された実践を手がかりに、日常の実践活動の疑問点、問題点が討議され、また多様な実践事例も紹介されました。本学会の川端末人、中西晃、米田伸次、渡部淳、安藤益代、多田孝志の各理事も担当の分科会に参加され、議論を深められていた。

4. 実践討論会

司会・進行は、国際基督教大学高校：渡部淳、討論者は、東京大学：佐藤学、目白学園高校：多田孝志、島根県仁多郡高田小学校：錦織明、日本国際交流振興会：安藤益代の諸氏でした。

実践討論会ではまず各討論者から次の視点での発言がありました。国際理解教育の実践の歴史的変遷と現状、島根県のこれまでの国際理解教育研究の成果について（多田）、島根の奥地の小さな学校での全校をあげての国際理解教育の展開の実践事例の紹介（錦織）、長い海外体験、また多くの留学生の指導にあたった体験からの国際理解教育推進への提言（安藤）、地球時代の学びの基本的な考え方、地域に立脚した教育改革の意義（佐藤）が語られました。その後、会場から国際理解教育を進める上での教師の役割、学校全体で国際理解教育を展開する際に留意すべき点、学びの質を向上させるための基本的な考え方、コミュニケーション能力を高めるための手立て、世界の冷厳な現実を教室に持ち込むことの重要性と問題点等々の質問や意見が活発に出され充実した議論が行なわれました。最後に司会進行の渡部氏が、議論をふまえて、今後の国際理解教育の実践の方向についてまとめられました。

なお、実践討論会の詳細については、紀要に掲載する予定です。

5 全体のまとめ

閉会式では、川端末人本学会副会長より全体の総括が行なわれました。川端副会長は、島根県国際理解教育研究会への謝辞を述べられました。次いで今回の実践研究会は、開催には大きな意義があったと述べられました。その上で、今回の実践研究会では議論が十分にされなかったこと、また課題として明らかになったことを整理し、学会として実践研究にどのように寄与していくのか、今後の学会の在り方が問われていくのではないかと指摘しまとめられました。

最後に会場校の森泰校長先生が、実践研究会の開催が教職員の教師としての力量を高めるよき機会となったこと、今後もこの研究を推進していきたいと決意を語られ一日の実践研究会が終了しました。

実践研究会の開催にあたり、会場の設営、掲示、参会者への案内から後片付け、会場校の教職員や島根県国際理解教育研究会の先生方、PTAや地元の方々を中心となって活動して下さいました。こうした多くの方々のご支援なくして今回の実践研究会は開催できませんでした。参加者一同、深く感謝した次第です。

◆日本国際理解教育学会実践研究会に参加して

◇高橋 英二（島根県松江市立城北小学校：校長）

実践研究会には、本校から11名が参加しました。異口同音に次の感想を述べていました。

ひとつは深い感動を覚え、当日の夜は興奮のためなかなか眠れなかったこと。二つ目には諸先生方の話により、今後の自分達の実践をみつめ直し、理論を得ることができ、自信のようなものが湧いてきたこと。このような声を聞き、本当にありがたく嬉しく思いました。今日は早速、学校の6年生の先生方が、今までの学習の発展として新しい試みをする取り組みについて話し合う計画を立てていました。他の学年もそれぞれに話し合い激論を交わしていました。その根底には実践研究会の興奮があったと思います。

◇大谷 明美（島根県松江市立八塚小学校：教諭）

研究会に参加するまでは、本庄の子達にコミュニケーション能力が育つ姿をみることができると疑問でした。しかし生き生きと活動する子供達に接し、手応えを感じました。実践討論会で語られたように、子供達が存分に体験することにより、自分を語る力が湧いてくることを知りました。心揺り動かされるような実践を参観し、また理論的なお話を聞いてよい勉強になりました。

◇佐貫 良子（島根県松江市立城北小学校：教諭）

どの学年、クラブもほんの少しだけずつ見せて頂きました。子供達は自分らしさを出して生き生きと表現していました。全校を上げての取り組みは大変でしょうが、子供達はとてもよく育ってきていると感じました。基調講演は、テーマに基づいてわかりやすく聞きやすく、もやもやしていたものが明確ですっきりしました。

実践と理論を結び付けることは容易ではない。しかし私達の日々の実践が21世紀の子供達を育てる上で大切なことを実感し、意欲が高まりました。素晴らしい会に参加させて頂きありがとうございました。学びの在り方、教師のあるべき姿を考えさせられました。

◇石飛 隆雄（島根県松江市立加茂中学校：教諭）

コミュニケーションの取り方が上手だったし、子供達の誠意が見られ、私の心が暖かくなりました。国際教育を一言で言えば「やさしさ」の教育だと思っています。

実践検討会の分科会に出席しましたが、話し合いがとても深く、バラエティに富んだものでした。国際理解教育に自信がもてました。益々ががんばりたいと思います。教科の研究大会にはない柔らかさがあり、スケールの大きさがあり、(嬉しくて)感動しました。

◇釜屋 清子（島根県八雲村立八雲小学校：教諭）

「宝くじ」ではずれた私にどんぐりを1個くれた時の男の子のやさしい顔、どの部屋にもキラキラした目を持った子供達がいました。

実践討論会では、先生方の熱心な話し合いに時間のたつのを忘れませんでした。贅沢な一日を過ごさせて頂きました。学んだことを明日からのエネルギーにすべく、もう一度振り返ってみたいと思います。

◇酒井 重善（島根大学：教授）

義務教育17年の私ですが、昭和48年に高校に転勤しました。久しぶりのこの種の研究会に参加しました。やはり確実に時代が変わっていくことを実感しました。問題は今回の成果をいかに今後に継続し、更に発展させていくかだと思います。

体育館の壁面を使った朝鮮通信使関係の画、その他教室の各所に張られた無言の掲示が雄弁なよき教育実践を物語っていました。今後の大会の在り方として参考になりました。

◇小島 多喜子（島根県松江市立本庄小学校：教諭）

お祭りの日、ほとんどの子供が帰った後で、ひとりで教室に残っていた担任に小さな声で「先生、さようなら」と言ってきた子がいた。その子は人前や教師に何か言うのが非常に苦手で、ほとんど一日声を聞かない子供であった。その子がわざわざ一人で教室に戻ってきて挨拶したことが担任には感動的な出来事であった。

その後この子も含めて、以前より自分らしさを表現できる子供が少しずつではあるが増えてきている。知識注入型の授業では引き出せない子供のよさが、今回の学級文化活動を通じて少しでも引き出すことができたことを嬉しく思っている。

◇会場校校長 森 泰（島根県松江市立本庄小学校校長）

この大会を契機に子どもたちも教師集団もひとまわり大きくなったような気がしています。「実践を通じて教師は育つ」ことを改めて強く感じました。今思えば国際理解教育と縁のあまりなかった小さな学校にとって「地球市民を育てる」という言葉は未知との遭遇でした。開催が決まって以来、行事の合間を縫って、研究主任に教職員は、世界を身近に感じるとはどういうことか、当日子ど

もたちにどのような活動をさせたらよいか等々について、夜遅くまで議論してきました。

「教師が変われば子どもも変わる」個人的には過去大きな大会を経験してきましたが、今回ほど、この言葉をかみしめたことはありませんでした。「本庄小の子どもは自分を出さない」という先入観をもっていた先生たちが、当日の子どもの活動に驚いていました。

校長としての驚きは、校務技師さん、事務の方々、養護の先生、地域の指導者の方達等の多くの方が時間を越え、柔軟な発想で個々の子どもにあった指導法で、見事に子どもたちの可能性を引き出して下さったことです。正直に述べて、「教育とは何だろう?」と思いました。本当にこの大会を通じていろいろなことを学ばせて頂きました。

日本を代表する先生方を迎えてのこの大会は、教師集団、子どもたちに自信とやる気を持たせただけでなく、保護者、地域に「自分たちの学校」という連帯感を培う機会にもなりました。いま、本校は確実に研究集団としての第一歩を踏み出しつつあります。このような機会を与えて下さった学会の皆様にご心よりお礼申し上げます。本当に有り難うございました。

アジア太平洋地域国際理解教育会議報告

◆アジア太平洋地域国際理解教育会議開催について

◇国際会議開催実行委員長：千葉泉弘（国際基督教大学教授）

日本国際理解教育学会は、「新しい国際理解教育を求めて」という副題のもとにアジア太平洋地域国際理解教育会議を、1999年1月20日から23日まで東京代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて開催した。第二次世界大戦後、ユネスコにより提唱された国際理解教育も、時代により、また国によりいろいろな変遷をとげてきた。我が国においても、1970年代から、それまでの国際理解教育から、帰国子女や海外子女の教育、異文化教育、そして日本の国際化のための教育と多様に進展してきた。一方、急速に進行する国際化やグローバル化のなかで、日本だけでなく、アジア太平洋地域の諸国においても新しい国際理解教育の必要性が指摘されるようになった。従って、今回の国際会議は非常に時宜を得たものと思われる。ユネスコをはじめ、APNIEVE（アジア太平洋地域国際教育価値教育ネットワーク）や、8ヶ国から19名の海外参加者と毎日100人を超す国内の参加者が出席した。

学級崩壊、不登校、いじめ等の教育現場の荒廃は問題にされているとき、国際理解教育は、単に他国や異文化の理解にとどまるだけでなく、世界中の国々や人々と「ともに生きてゆく」ための心の通った教育、共生の概念に立った教育を推進する役割を担わなければならない。また多くの学校や教師も、総合学習の導入をひかえて、自主的な国際理解教育の開発に迫られている。熱心な討議を通して、共生の概念に立脚した新しい国際理解教育、子供の成長を重視し、子供の視点に立った教育実践、アジア太平洋地域の諸国や教育関係者との対話や経験の共有の必要性が指摘された。

当学会も設立後8年を経過して、国際会議を開催するところまで発展してきたが、この国際会議を契機として、国際的に開かれた学会として、日本とアジア太平洋地域の諸国との架け橋になることが期待されている。

会議の報告書は、3月下旬に日英両語で出版される予定である。

◆アジア太平洋地域国際理解教育会議プログラム

《第1日目：1月20日（水）》

- ・開会式 歓迎の辞 天城 勲（日本国際理解教育学会会長）
祝辞 Mr. Zhou Nanzhao（ユネスコバンク事務所代表）
Dr. L.R. Quisumbing（APNIEVE会長）
石井米雄（日本ユネスコ国内委員会会長）
開催要項説明 千葉泉弘（国際基督教大学教授・国際会議開催実行委員長・学会常任理事）
- ・学校訪問 目白学園中学校・高等学校
コーディネーター 多田孝志（目白学園高等学校教諭・学会常任理事）
 - ・クラブ見学 チアリーダーディング（昨年度全国大会優勝校）
 - ・授業見学 中学校・高等学校
 - ・基調講演「我が国における私学の役割と国際理解教育の展開」佐藤弘毅（目白学園理事長）
 - ・生徒パブリックスピーチ
 - ・現場教師との懇談 目白学園教職員他

《第2日目：1月21日（木）》

- ・全体会 「グローバリゼーションとアジア太平洋諸国：教育の役割」
モデレーター 川端末人（神戸大学名誉教授・学会副会長）

基調講演：

1. 世界とアジア太平洋地域の国際理解教育の現状
Mr. Zhou Nanzhao（ユネスコアジア太平洋地域事務所）
2. グローバリズムと二十一世紀の新しい教育のパラダイムの必要性
Dr. L.R. Quisumbing（APNIEVE 会長）
3. グローバリゼーションとアジア
Mr. Napitupulu（インドネシアユネスコ国内委員会会長）
4. 日本と韓国：明日のより良き理解のために今日なすべき行動
Prof. Cha In-Suk（ソウル国立大学ユネスコ哲学講座教授）
5. 国際理解教育 二十一世紀への挑戦 タイの視点
Ms. Savitri Suwansathit（元タイ教育省国際担当次官補）
6. グローバリゼーションと他とともに生きることを学ぶ
天城勲（日本国際理解教育学会会長）

・テーマ別セッションⅠ

「国際理解教育の新しい課題と政策（21世紀に向けて）」

- コーディネーター 中島章夫（国際教育交流馬場財団理事長・学会理事）
Ms. Savitri Suwansathit（元タイ教育省国際担当次官補）

発題者：

1. 光田明正（桜美林大学教授・学会理事）
2. Mr. Dennis Bolster（オーストラリア ヴィクトリア州教育省学校プログラム部副部長）
3. Mr. Ni Chuan-rong（中国 北京教育研究所所長）
4. 堀江振一郎（国際交流基金人物交流部長）

《第3日目：1月22日（金）》

・テーマ別セッションⅡ

「国際理解推進のためのカリキュラムの諸問題—初等中等教育を中心に」

- コーディネーター 樋口信也（帝京大学教授・学会常任理事）
Dr. M. Fakry Gaffar（インドネシア バンドン教員養成大学学長）

発題者：

1. 石坂和夫（岐阜聖徳学園大学大学院教授）
2. Ms. Li Jing（中国 北京教育研究所）
3. 渡辺良（国立教育研究所国際研究協力室長）
4. 多田孝志（目白学園高等学校教諭・学会常任理事）
5. Dr. Rohani Abdul Hamid（マレーシア教育省カリキュラムセンター）

・テーマ別セッションⅢ

「国際理解教育のための教員養成と研修」

- コーディネーター 中西晃（目白学園女子短期大学教授・学会副会長）
Prof. Rene Romero（フィリピン ユネスコ協同学校事業 APS コーディネーター）

発題者：

1. Dr. M. Fakry Gaffar（バンドン教育養成大学学長）
2. 森茂岳雄（東京学芸大学助教授）
3. 林英和（神奈川県川崎市総合教育センター）
4. Dr. Chung Doo-young（韓国ユネスコ国内委員会）
5. Prof. Dr. Nik Azis Bin Nik Pa（マレーシア マラヤ大学教育学部教授）

《第4日目：1月23日（土）》

・テーマ別セッションIV

「国際理解教育の実践活動」

コーディネーター 米田伸次（帝塚山学院大学国際理解研究所所長・学会常任理事）

Mr. Dennis Bolster（オーストラリア ヴィクトリア州教育省学校プログラム部副部長）

発題者：

1. 井手葆／今田晃一（大阪教育大学附属池田中学校副校長及び同校教諭）
2. 田畑てるこ（大阪府松原市立松原第七中学校）
3. Prof. Rene Romero（フィリピン ユネスコ協同学校事業 ASP コーディネーター）
4. Ms. Prayad Sriboonchoo（タイ ユネスコ協同学校事業 ASP コーディネーター）

・全体会「総括・結論・将来展望」

コーディネーター 千葉晃弘（国際基督教大学教授・学会常任理事）

パネリスト

1. Ms. Savitri Suwansathit（元タイ教育省国際担当次官補）
2. Dr. M. Fakry Gaffar（インドネシア パンドン教員養成大学学長）
3. 中西晃（目白学園女子短期大学教授）
4. 米田伸次（帝塚山学院大学国際理解研究所所長）

・閉会式 挨拶 天城 勲（日本国際理解教育学会会長）

◆アジア太平洋地域国際理解教育会議に参加して

◇池上 貞男（難民を助ける会）

学会参加は久しぶりである。副会長の中西先生は、私が昭和58年東京学芸大学海外子女センター研究生のときの指導教官であり、あの頃センターでの色んな研究会にご一緒させて頂いた川端先生（神戸大学名誉教授、現副会長）や多田先生（目白学園教諭、現常任理事）がご健在で活躍されておられる様子を拝見し心強く思った。

私の勤務する「難民を助ける会」では、啓発事業の一つとして「地雷」教育用ビデオを制作中である。現に地球上に増設された地雷は約1億1千万個と言われ、世界中で毎日約70人、1時間に約3人の被害者を出している「静かな悪魔」である。現状では年間地雷撤去個数は約10万個と言われ、地球上にいま埋設されている地雷の除去に1100年という想像しがたい長い年月、約13兆円の経費と除去作業上での殉職推定者約2万1千人を出さねばならないという地球規模では深刻な課題なのである。国際理解教育の中で、少しでも多く地雷問題を取り上げて頂けるよう教育現場の先生方に働きかけていくのが私の立場である。

学習指導要領や国民性の影響もあるのだろうが、日本の国際理解教育の内容は言語、習慣、服装、料理などの広い意味での文化面でのテーマが多く、民族問題とか、国内外の紛争というテーマは極めて少ないように思われる。大阪教育大学教育学部附属池田中学校の実践活動の中に「インドネシアの暴動について―暴動から半年たった今―」というテーマがあった。これに取り組んだ二人の女子生徒さんに敬意を表すが、このテーマについて臨時講師のような形で招聘されたインドネシアからの留学生と日本の女子生徒の間に白熱した意見の対立があり、私の想像するところ、インドネシアの実情とあまりにもかけ離れた日本の生徒達の意見や提言に、インドネシアの留学生が不快感を覚えたのではないだろうか。もちろん私はこの生徒達を非難するつもりは毛頭ない。優秀な生徒達が精一杯の努力をして自分なりの分析をし、意見を固め、提言を作り上げたのだろう。白熱した議論も大いに結構だ。ただ、後に憎悪感が残るような議論は避けたいと思うが、これだけ極端な見方や考え方の相違を体験するからこそ、国際理解教育が必要なのだと言えよう。

地雷問題についても数名の専門家の手になる著書があり、それを研究されればよいとも思うが、現実に小・中・高の先生方にはそれだけの時間的余裕はないのかも知れない。もしそうだとすれば「地雷問題の指導用引き」みたいなものを作らねばなるまい。「それは貴方の仕事ですよ。」という中西先生のお言葉が飛んできそうである。年齢的には私の方が少し兄貴分なのだが、元指導教官のお言葉には弱い。

私どもの会も11月末に海外から21カ国、総数約200名の参加者を得、アナン国連事務総長、小沢総理からメッセージを頂き第3回NGO国際地雷会議を主催した経験があるので、今回のこの国際会議における関係者のご苦勞を、我が身に振り替えて感謝申し上げたい。今後も更に回を重ねつつ発展していわれることを心から願うものである。

◇山田 千明 (筑波大学助手)

「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」とユネスコ憲章の前文にもあるが、「人の心の中」にまで踏み込んで平和の文化の構築は、一朝一夕でなし得るものではない。息の長い地道な、そして意図的な働きかけが必要となる。そういった意味で、ユネスコの理念をベースにしなが、アジア太平洋地域の専門家が、各地での国際理解教育に関する理論、政策、実践について語り合う、このような国際会議開催の意義は大きい。私は、つねづね、日本国際理解教育学会が、学会紀要等を通して、ユネスコを中心とした国際教育の動向に関する情報を提供してくれ、しかも、日本語だけでなく資料を原文で紹介してくれることに大変感謝している。それは、発信された文書を直接理解することができるからである。さらに、今回の会議では、アジア太平洋地域から「人」が集まり、講演、セッションの公式の場はもとより、コーヒープレイクの間も含めて、まさに直接 face to face で熱のこもったお話を聴くことができ、うれしかった。

参加した全体会、テーマ別セッションのいずれも興味深かったが、特に私自身の関心領域から「国際理解教育のための教員養成と研修」のセッションから多くを学ぶことができた。インドネシア、日本、韓国、マレーシアから発表があった。各国の政治的情勢、地域性、歴史的背景等に規定されるものの、望ましい国際理解教育のあり方を考え、その実現のために重要な役割を担う教員をいかに養成するか、また、現職教育をどうするかについては、その試みを共有できる部分も多い。また、このような会議を通して、それぞれの試みについて学び合うことができ、各国の専門家たちが協力しながらより有効なものを求めていけることを実感した。日本の教員養成大学の学生が欧米志向であるというデータに関して、参加者からも質問が出たが、日本も含めアジア太平洋地域の人々が西洋文化をどう捉えているか、また、他のアジア太平洋地域についてはどうか、そして、それに対して教員はどのような働きかけをすべきか、ということについて、深刻に考えざるを得なかった。

私の隣に座っていた参加者は、新聞記事でこの国際会議が開催されることを知ったという。国際理解教育を特に推進しているわけでもなく、外国人児童が在籍するのでもない、ごく普通の公立小学校の先生だ。この会議で印象深かったのは、国際理解教育を日本の枠内から一歩外に足を踏み出して考えていること、グローバルな視点を持ちながら、しかも、アジア太平洋地域にしっかり足場をおき、民主主義、価値教育、ユネスコ21世紀教育国際委員会が、その報告書の中で示した学習の4本柱の1つ「Learning to live (with others)」等について共に考えたこと、そして、前述のような、熱心な現場の先生の参加である。

充実したこの国際会議の裏には、計画、運営、アジア太平洋地域の専門家に対する講演依頼、発表抄録等の翻訳、通訳等大変な準備があったことは想像に難くない。最後にこのような、国際理解教育について広い視点から考える機会を提供していただいたことに心からお礼を申し上げます。

◇森吉 直子 (ペンシルバニア大学大学院)

今学会の発表を通して、「国際化—Globalization」という名の下に、今、世界がある一つの潮流に乗って動いているということ、そしてそうした動きに引き起こされる現象に対する一種の危機感のようなものを覚えました。

それはどういうことかということ、「国際化」という動きが生まれるためには、まず主流となる経済的先進国が存在します。そして、近代ハイテクの恩恵を享受するために、発展途上国が国・地域を挙げての政策に取り組み、世界から取り残されないためのネットワーク化を計ります。つまり、現在の globalization は、先進国がリードする技術力に追従する形で途上国が参加している構造を取っています。始めから、先進国がその舵を握っているのです。最新の技術を介して世界がネットワーク化されることが悪いこととは言いませんが、そうしたネットワーク化が進むと同時に、経済的もしくは他の要因で globalization の動きに乗じきれない社会があったとしたら、globalization は「国際化」ならぬ「国・差異・化」を生み出す原因になります。

学会では、異文化や異なる価値観を認め、尊敬し、お互いが栄える社会づくりが大切だと話し合いましたが、そこで考える必要があるのが「差異—difference」の意味ではないかと思いました。人間は、「文化」の範疇とされる、衣・食・住や価値観の違いを尊重することはできたとしても、「文明」(といってよいのでしょうか)の差・技術の差異については、認めることはできても尊敬し合うことは難しいのではないかと、思います。そして、だからこそ、技術的にリードする先進国と同じ土壌に上がろうとして、多くの発展途上国がネットワーク化を計っているのではないのでしょうか。もし、コンピューターのない社会が尊敬されて、共に栄える世界であるならば、これほどまでに globalization という動きは起こらなかったはずだと考えます。今や、ハイテクなしでは社会の発展はありえない、とまで考えられているのではないかと、そして、こうした意識が益々世界の中の「国・差異・化」を生じさせているのではないかと、という危惧を払拭することができませんでした。

そこで、我々が忘れてはいけないことが、「Empowerment of Disadvantaged」ではないかと考えました。「国・差異・化」と同時に、advantaged と disadvantaged の人々との差が広がっていきます。共に栄え、共にこの世に生まれた一人の人間として幸せを享受するためには、先進国または advantaged people と disadvantaged people の両方の側からの取り組みが必要になります。advantaged people は、人が皆対等であり、差異は認める必要と、解消する必要の両方があるのだということ、そして disadvantaged people は、主流に追従することで自分を見失わないこと、人間としての尊厳や対等観を育成する教育が大切であると考えます。大阪の現場の先生方の発表がこの2つの側の歩み寄りを顕わしていたように感じました(大阪教育大学附属池田中学校が advantaged people の教育を、大阪府松原市立第七中学校が disadvantaged people の教育を)。そして、この会議を通して再度強調されたことは、こうした意識改革・変容は、頭ではなく心のレベルで起こらなければいけないということです。適応という現象をとってみても、異文化の規範を、まず行動面でまねてみて、次に認知面で捉えるようになり、そして情動面でその文化の人と同じように感じるよう

になると言われています。「心」で異文化と接し、差異を尊重し、共に栄えるようになるためには、知識を詰め込むだけの教育ではなく、「喜怒哀楽」を伴うような、時には自己を問うような体験が必要ではないでしょうか。そうした取り組みについて、現場の先生方にもう少しお話を聞いてみたかったです。

「Holistic approach」ということをキソンビン先生が強調されていましたが、調和のとれた人間、emotionless でも emotional でもない、emotion をもった人間の育成、これが、これからの「国際理解教育」が担う大切な役割の一つではないかと強く感じると同時に、結局は、人間として基本的なことが今求められている時代なのだなど、改めて教育の難しさを実感した次第です。

私にとって、この国際会議に参加できたことは大きな恵みでした。会議に参加した全ての人が、教育の意義についてそれぞれの意味を見つけて、今後の取り組みに役立てていかれる、そうした会になったことを心より願っています。

各委員会報告

◆研究委員会

研究委員会副委員長：宇土 泰寛（蒲田小学校）

研究委員会は、21世紀に向けた新たな実践を目指し、今年度は、大学関係5名、学校関係7名、社会教育関係1名の合計13名の委員によって、進めています。委員会は、毎月1回、開催して、新井委員長を中心に、継続的な研究を行っています。ただ、新メンバーで発足したばかりであり、まだ、前回の計画で述べたことも、すぐに実現するまではいきませんが、その実現に向けて、努力していきたいと考えています。

今年度は、まず学会での特定課題についての検討を中心に行っています。

6月の総会での委員会計画承認後、メンバーの決定や発足の準備の会議を理事で重ねた後、8月末に第1回目の委員会を開き、活動を開始しました。そして、2月末までに、7回の委員会及び特定課題プロジェクトの話し合いを持ちました。

第1回、2回の研究委員会で、今までの本学会のシンポジウムや課題別討論会で扱ってきたテーマを検討したり、学会における特定課題とテーマ設定の方向性について論議したりして、理論的課題、実践的課題を出し合い、討議していきました。

そして、3つのテーマの候補を出しました。

- ① 新たな教育状況の中での国際理解教育とその実践上での意味付け
- ② グローバリズム対ナショナリズムの中の国際理解教育の在り方
- ③ アジアとの共生

次に、第3回、4回の研究委員会では、事前に第9回大会準備委員会にも参加し、公開シンポジウムとテーマが重ならないようにしようと合意したのを受けて、研究委員会が一番の関心は、総合的な学習との関連のテーマだったのですが、特定課題研究では、「国際理解教育の基本的概念を問う」を2、3年かけて追求していくことにしました。

そこで、挙げられたのが「国」の学習でした。このテーマは、日本の学校現場では、タブーと言ええるかのように、現在、国際理解教育を積極的に実践してきている者にとっても、最も欠落しているものでした。あまりにも荷の重いテーマでもあり、いろいろと論議しましたが、今回の総合的な学習等に向けて、新しい教員層にも、国際理解教育への関心が広まっている中、この最も基本的な概念を扱う必要があるとの共通理解に達し、火中の栗を拾うごとく「国」に絞っていきました。

第5回、6回の研究委員会では、「新しい国際化状況とは」、「教育状況とは」、「国とは」、「民族とは」、「仮想国家とは」、「グローバリズムとは」、「学習とは」などなど、毎回活発な論議の起こる研究委員会ですが、今回のテーマに関しては、もう議論百出で、様々な文献も参考にし、検討を重ねていきました。

このように、研究委員会は、毎回、実践者と研究者が共に、意見や考え、理論や実践を出し合い、本当に活発に議論を出し合っています。ただ、土曜日や日曜日に実施していますが、時間的忙しさや予算の制限で、全員が集まるのが難しいのが現実です。

それだけに、計画でも挙げていました、コンピューター等を使った情報ネット化をやはり進めていきたいものだと思います。そして、今回もいろいろと助言をいただきましたが、学会員の方からのご意見等もより多く参考にしながら進めたいものだと思います。

今回の特定課題は、正式には今春、プログラムに掲載されますが、学会では、ぜひ建設的な姿勢で、活発な議論をお願いしたいと思っています。

◆将来ビジョン検討委員会

将来ビジョン検討委員会委員長：川端 末人（神戸大学）

上越教育大学における平成10年度総会において、学会の将来構想について検討するため設置された将来ビジョン委員会は、中島

章夫・多田孝志・米田伸次・渡部淳および川端による委員会構成を決定したが、学会の財政事情から予算配分を打ち切られたこともあって、昨年12月19日（土）15:00～19:30馬場財団理事長室で委員会を開催するにとどまった。議題は「学会の中・長期ビジョンとして何を考えるか」であった。委員のうち校務で出席できなかった渡部委員は書面で意見を提起され、全委員が個別の意見を開陳のうえ全体討論を行った。検討提案の主要なものは、次のものであった。

- ・国際理解教育のカリキュラム開発のため、ワーキング・グループを設け、学会の総力を結集する。
- ・紀要並びにニューズレターの内容の充実。
- ・国際理解教育に関する理論的研究を生かした教育実践の質的向上とともに、教育実践事例の検討による理論研究の深化を図る方策を志向する。
- ・全国的な地域ブロック毎の国際理解教育研究会の開催。
- ・総合的な学習における国際理解教育の教育現場での実態の把握。
- ・学会の総力を挙げ『国際理解教育の手引き』を作成する。
 - ・ユネスコ、APNIEVE等の国際組織との有機的連繋、アジア太平洋地域諸国の国際理解教育機関・研究者との提携・交流。

◆紀要編集委員会

紀要編集委員会委員長：渡部 淳（国際基督教大学高等学校）

紀要第5号の完成に向けて、これまで5回に渡って編集委員会を開いてきました。応募原稿の査読体制の見直し（覆面ジャッジをこれまでの2名から3名にすることなど）を通して、審査により公正を期すべく、多くの会員のご協力を得て編集作業を進めています。これに伴って、査読用紙などフォーマットを全面的に改訂しながら編集を進める関係上、今年度は、予想以上に時間と労力が必要とされているのが実情です。一方で、より身近に感じられる紀要にするべく、理事会の承認も得て、学会の年間活動を誌面に反映することや海外事情、随想欄を新設することなどにも取り組んできました。現時点では、ほぼ順調に作業がすすんでいると考えております。

理事会・常任理事会報告

◆第2回常任理事会議事録

日時：平成10年10月11日（日）13:00～17:10

場所：目白学園女子短期大学 会議室

出席者：天城、天野、新井、安藤、宇土、川端、島、多田、千葉、樋口、渡部、中西の各常任理事及び中島理事

1. 国際会議助成金申請の経過報告と開催について

千葉理事（国際委員会委員長）より資料に従って経過報告があり、助成金交付の見当がついたので予定通り実施する旨報告があった。提案資料を検討した結果以下、のことが確認及び修正された。

- ① 午前の部は9時30分から12時30分、午後は2時から5時までとする。
- ② 1月20日の午後の学校訪問は外国人と日本人訪問者が同数になるように工夫し、訪問校は多田理事に一任する。
- ③ 21日の夜にreceptionを行う。
- ④ 日本人参加者案内に国内の国連諸機関を追加する。
- ⑤ 1月22日午前のセッションのコーディネーターを樋口理事とし、発題者を石坂和夫会員、韓国及び東南アジア参加者とする。
- ⑥ 1月22日午後のセッションの日本からの発題者を佐藤郡隆理事及び近辺の教育センター研修担当者とする。
- ⑦ 1月23日のテーマを実践活動を中心としたものとし、地域社会と学校の協力などの視点をいれる。このセッションのコーディネーターを米田理事とし、日本からの発題者は米田理事に一任する。
- ⑧ 広報担当を中島理事とし、多くの方に参加を求める。
- ⑨ 第9回大会で、国際会議の報告を行うようプログラムに組み入れる。

2. 平成11年度研究大会の準備状況について

樋口理事より実施要綱案に基づいて報告があり検討の結果、以下のことが確認された。

- ① 初日の課題別討論会及び同報告会に代わり、現在研究委員会で検討している「特定課題研究」を実施する。テーマは12月に予定されている理事会で決定する。
- ② 大会前日に理事会を目白学園で開催する。
- ③ シンポジウムのパネリストに中学校関係の方も依頼する。

- ④ 準備委員会のうち学会員でない方々にはできるかぎり会員になっていただくよう交渉する。
3. 研究員会の活動について
宇土理事（研究委員会副委員長）より資料に基づいて説明があり、了承された。なお、早急に特定課題のテーマ案を決め理事会に諮ることとした。（12月理事会で予定）
4. 実践研究会の開催について
多田理事（実践研究委員会委員長）より資料に基づいて報告があり、検討した結果次のことを確認し了承された。
① 基調講演のテーマは「国際理解教育の実践的課題」とする。
② 開会式での挨拶は中西副会長とし、閉会式での学会を代表しての総括を川端副会長にお願いする。
③ 会費は会員、非会員を問わず1,000円とする。
5. 紀要第5集の編集状況について
渡部理事（紀要編集委員会委員長）より資料に基づいて説明があった。
① 応募論文の件数が多いので、依頼論文は例年より少なくすむと思われる。
② 依頼論文は、田淵五十生理事の上越大会での発表をもとに執筆を依頼してある。
③ 実践研究会及び国際会議の報告を掲載する方向で検討している。
④ 学会の活動等についての提言や感想などの原稿も取り入れたい。
6. 平成10年度予算の執行状況と補正予算について
中西理事（事務局担当）より別紙の資料で10月6日現在の会費納入状況と支出状況及び会費未納者リストの報告があった。検討の結果次のように話しあわれた。
① 本年度の決算は今後の会費納入にもよるが、赤字になることもやむを得ない。
② 各委員会は可能な限り経費の節減をする。従って遠方からの会議出席者に対する旅費支給はやむをえないが、東京近郊からの出席者に対しては例年の支給を留保する。
③ 当座のところ、実践研究委員会、紀要編集委員会、国際委員会はそれぞれ年度当初予算から10万円ずつを減額する。また、将来ビジョン検討委員会の予算はなしとする。
④ 平成8年から10年までの間の年会費及び入会金の未納者は合計207名で、金額は101万9千円である。会費未納者には、4、5日前に督促状をだした。
⑤ 以上のような状況であるが、会費納入が増えれば年度当初の予算に復活する。これについては次回の理事会で諮る。
7. 新入会員審査と退会者の報告
中西理事より資料によって、退会者7名、11年度よりの退会者6名が報告された。また、新入会員11名の審査の結果承認された。推薦者の記入されていない者に対しては事務局より問い合わせることとした。
千葉多佳子（Institute of Education University of London）、瀬戸健（富山県教育委員会高岡教育事務所）、限部英夫（国際教育交流促進協会）、木村洋子（三重県鈴鹿市立神戸中学校）、金光律子（国際理解教育センター）、田淵美和子（千葉県松戸市立柿ノ木台小学校）、宇治川秀（東京都立大泉北高等学校）、新村出（東京都大田区立松仙小学校）、岡崎裕（大阪市教育センター教育研究室）、谷田部玲生（国立教育研究所）、田尻信市（筑波大学附属高等学校）。
8. その他
次回の理事会は平成10年12月20日（日）午後2時から行い、終了後忘年会を行う。

◆ 第3回理事会議事録

日時：平成10年12月20日（日）14：10～16：40

場所：目白学園女子短期大学 会議室

出席者：天城勲、天野正治、新井郁男、安藤益代、岡田真樹子、宇土泰寛、川端末人、島久代、多田孝志、千葉果弘、中島章夫、中西晃、中村幸士郎、樋口信也、星村平和、光田明正、嶺井明子、米田伸次、渡部淳 以上19名

1. 報告事項

(1) 第9回年次大会の準備状況

星村大会準備委員長より資料に基づいて報告され、以下の点を修正の上承認された。
「公開シンポジウムのみ参加者は、参加費として1,000円を支払って頂く。」

(2) 各委員会よりの報告

① 実践研究委員会

多田委員長より11月11日に松江市の本庄小学校で行われた研究会について、別紙の資料並びに参加者の感想をもとに報告があった。参加理事からも有意義な研究会であった旨の感想があった。なお、『教室からアジアが見える』の冊子には学会も費用を出していることから、学会の名前を入れるべきだという意見がだされ、今後はこのような場合は留意することとした。

② 紀要編集委員会

渡部委員長より別紙の資料に基づいて第5集の編集状況の報告があり、次のような意見が出された。

- ・ 編集後記にでも査読者名を掲載する。
- ・ 紀要の印刷部数につき再考慮する。
- ・ 教育実践の方々にも投稿しやすく読みやすいものになりたい。
- ・ 随想欄、懇話会報告の掲載を検討したいし、海外の国際理解教育関係の見聞記なども掲載したい（例えば中村幸士郎理事への依頼など）。
- ・ 文献目録の掲載も考える（現在は5年毎に実施）。

③ 将来ビジョン検討委員会

川端委員長より12月20日に開かれた同委員会につき次のような報告があった。

- ・ 実践研究会を一層充実したものになりたい。
- ・ 社会教育や生涯学習への広がりも今後の課題としたい。
- ・ カリキュラム開発研究を促進したい。
- ・ 日本ユネスコ国内委員会『国際理解教育の手引き』のような刊行物を学会で編集・出版し国際理解教育に対する知的指導力を発揮することとしたい。
- ・ 諸外国との連携特にアジア太平洋地域の諸団体との連携を密にした活動をしたい。これに対し次の意見が出た。
 - ・ 新指導要領の中での国際理解、国際交流、国際認識をどう学校教育の中で展開すべきかをカリキュラム開発との関連で考慮したい。
 - ・ 日本の国際理解教育研究の成果を海外にも発信させたい。

(3) 会費納入状況の報告

中西理事より別添の資料に基づいて12月20日現在の会費納入状況と今後の予算執行並びに会費未納者について報告があった。10月の常任理事会で報告した状況より幾分かは会費納入状況は好転しているが、しかし、会員の56.7%が会費を納入するに過ぎない状況なので、各理事よりも知人に対し督促して欲しい旨の要望があった。また、新入会員、住所・電話等の変更者が多ので、名簿の追加及び改訂版を次号のニューズレター発行と同時に会員に送付する旨の報告があった。

2. 審議事項

(1) 国際会議について

千葉委員長より資料に基づいての報告があり了承された。

(2) 第9回大会の「特定課題研究」テーマ及びパネリストについて

宇土副委員長より資料に基づいて研究委員会の経過報告及び課題についての提案があり討議された。主な意見は次の通り。

- ・ 「国」では不十分であり「国民国家」で議論しないと国と国との「際」が不明確になる。
- ・ 課題が大きなテーマで果たして6月の大会で発表できる研究者がいるのか。「国家が今どう教えられているのか」の方が実際的ではないのか。
- ・ 国民教育をどうするのか、ナショナリズムをどう考えるのか。これによって、衣食住等の文化も視野に入れることができる。

以上の意見を踏まえて11年2月20日に研究委員会を開き、テーマ及びパネリスト案を検討の上、3月に開催予定の常任理事会で決定する。

(3) 新入会員審査結果 次の4名の入会者が承認された。

蔭山雅博 専修大学
小堀辰夫 栃木県総合教育センター
永田忠通 国立教育研究所
奥田真丈 芦屋大学

3. その他

- (1) 第10回大会開催校は奈良教育大学と交渉中である旨中西理事より報告があった
- (2) 国際委員会の平成11年度のスタディツアーは8月上、中旬にドイツを中心にした旨の提案が千葉理事よりあり了承された。
- (3) 第10回海外子女教育・国際理解教育研究会、関東ブロック研究大会から学会への後援依頼があり了承された。
- (4) 学会の科学研究費補助金の会計報告を理事会にされたいとの意見が出された。

◆会員の図書・文献寄贈のお願い

会員の皆様が開かれた文献・図書・報告書・教材など、また、会員の所属する学校での紀要等がありましたら、学会にご寄贈ください。最近そのような資料を求められる方が増えております。学会の宣伝にもなりますのでお願いします。また、ニューズレターなどで会員にもお知らせしたいと思います。またその際、助成金をいただいている公文国際奨学財団にも送りたいので、できましたら2部お送りいただけますと幸いです。

尚、今回の寄贈図書・文献は下記の通りです。寄贈して下さった方々にはこの誌上を借りて厚く御礼申し上げます。

- 下羽友衛氏より 同氏編 『学び方・ライフスタイルを見つける本 -アクティブな地球市民になるためのゼミ-』 太郎次郎社
- 光田明正氏より 同氏著作 『「国際化」とは何か』 玉川大学出版部
- 山崎俊英氏より 同氏著作 『平成10年度東京都教員研究生研究報告書：異なる文化をもった人々と共生する資質や能力を育てるカリキュラムの開発 -総合的な学習の時間における一試案-』

お知らせ

◆入会会員のお知らせ

以下の18名の方が平成10年7月から2月末の間に入会しました。

氏名	所属	連絡先
隈部 英夫	国際教育交流促進協会	101-0045 東京都千代田区神田鍛冶町3-3 大木ビル7F
瀬戸 健	富山県教育委員会高岡教育事務所	935-0285 富山県氷見市論田27
木村 洋子	三重県鈴鹿市立神戸中学校	510-0954 三重県四日市市采女町430-2
金光 律子	国際理解教育センター	222-0031 横浜市港北区太尾町2166-1 エクス大岡山C-204
田淵美和子	千葉県松戸市立柿ノ木台小学校	270-2218 千葉県松戸市五香西3-1-8 フジタハイム五香A-139
宇治川 秀	東京都立大泉北高等学校	179-0072 東京都練馬区光が丘3-8-12-1020
新村 出	東京都立大田区松仙小学校	146-0085 東京都大田区久が原1-11-1
岡崎 裕	大阪市教育センター	619-0224 京都府相楽郡木津町兜台5-1-3, 12-401
谷田部玲生	国立教育研究所	153-8681 東京都目黒区下目黒6-5-22 国立教育研究所
田尻 信市	筑波大学附属高等学校	112-0012 東京都文京区大塚1-9-1
新宅 美保	English & World	004-0847 北海道札幌市清田区清田7条1丁目12-15
山本 一男	埼玉大学留学センター	203-0012 東京都東久留米市浅間町3-20-8
小関 一也	早稲田大学教育学部	161-0034 東京都新宿区上落合2-26-35 マンション・フォルム301
蔭山 雅博	専修大学	189-0024 東京都東村山市富士見町3-18-16
小堀 辰夫	栃木県総合教育センター	321-4323 栃木県真岡市東沼1539
永田 忠道	国立教育研究所	153-0064 東京都目黒区下目黒6-5-22 国立教育研究所
奥田 眞丈	芦屋大学	171-0032 東京都豊島区雑司が谷3-16-5
千葉多佳子	Institute of Education University of London	030-0913 青森県青森市東造道2-11-6

この結果現在の会員数は482名です。

◆退会会員のお知らせ (平成11年3月31日をもって退会)

以下の19名が平成11年3月31日をもって退会されます。

岩崎 嘉蔵 (帝塚山学院泉ヶ丘中・高校)	地主 道生
老田 昭 (エスケー化研)	高松 孝夫 (竹間沢小学校)
奥田 孝晴 (文京大学国際学部)	寺尾 明人 (国際基督教大学)
河合 芳宏 (上越教育大学)	土方 純子
Carrión Carmen (ACS予備学院)	平井 軍治 (青森県立八戸商業高等学校)

久保田 公夫 (松山市立東中学校)

Lyckle Griek (広島大学国際協力研究科)

小林 公司 (相模原市立麻溝台中学校)

佐藤 恵美子 (中国帰国者定着促進センター)

篠田 忠 (美濃加茂高等学校)

茂木 喬

森 勝史 (帝塚山学院泉ヶ丘中学校)

横田 啓子

吉田 恒 (スイス公文学園)

◆会員の連絡先移動

(以下、学会員の方々の連絡先が変更しました。尚、連絡先・所属等に変更があった方は必ず書面にて事務局にご連絡下さい。)

- 伊藤 淳一 : 〒353-0006 埼玉県志木市館1-6-9-401
今井 義量 : 〒862-8001 熊本県熊本市武蔵ヶ丘6-4-36-601 TEL: 096-338-3617
宇野 三恵子 : 〒064-8540 北海道札幌市中央区宮の森二条16-10-1 TEL: 011-611-9231
大津 和子 : 〒002-8071 北海道北区あいの里1条6丁目2-2-804 FAX: 011-778-5837
大西 理子 : 〒516-0065 三重県伊勢市二俣町471-67 TEL: 0596-23-1340
大野 亜由未 : 〒653-0053 兵庫県神戸市長田区本庄町5-2-4 TEL: 078-733-5101
大堀 哲 : 〒351-0015 埼玉県朝霞市幸町1-7-21 TEL: 048-468-2110
荻野 治雄 : 〒191-0002 東京都日野市新町1-5-25
奥田 沙織 : 〒464-8601 愛知県名古屋市中千種区不老町1名古屋大学法学部
奥田 秀樹 : 〒195-0072 東京都町田市金井4-17-4
尾中 夏美 : 〒020-0106 岩手県盛岡市東松園2-9-9 TEL: 019-661-7171
柿沼 路夫 : 〒241-0814 神奈川県横浜市旭区中沢1-44-25
亀山 直見 : 〒582-0005 大阪府柏原市法善寺2-15-22エクセレント法善寺501
川嶋 実 : 〒590-0404 大阪府泉南郡熊取町大久保西14-20
金子 玲子 : 〒336-0933 埼玉県浦和市広ヶ谷戸572 TEL: 048-881-8766
香西 武 : 〒782-0000 高知県香美郡土佐山田町891-8
清島 眞 : 〒911-0842 福井県勝山市鹿谷町志田第16号-26-1サンコーポラス1-402
TEL・FAX: 0779-89-1997
桜井 高志 : 〒181-0003 東京都三鷹市北野4-2-26-104 TEL: 03-5384-7830
佐々木かな子 : 〒606-0807 京都府京都市左京区下鴨泉川町36-70
佐藤 信之 : 〒583-0881 大阪府羽曳野市島泉5-12-2
曾我 邦子 : 〒657-0805 神戸市灘区青谷町2-7-1神戸海星女子学院 TEL: 078-801-2277
高橋 輝 : 〒124-0022 葛飾区奥戸6-18-8清田ハイツ102 TEL・FAX: 03-5698-2530
竹越 由一 : 〒183-0002 東京都府中市多磨町1-11-8-105 TEL: 042-361-1361
竹本 英代 : 〒753-0303 山口県山口市仁保下郷1886-17 TEL: 0839-27-0881
立津 政宏 : 〒531-0071 大阪府大阪市北区中津3-34-18
谷川 彰英 : 〒305-0032 茨城県つくば市竹園2-809-105 TEL: 0298-53-3712
筒井 雍之 : 〒612-8026 京都府京都市伏見区桃山町伊賀50京都橘女子高等学校
TEL: 075-623-0066 FAX: 075-623-0070
鶴巻 一郎 : 〒362-0015 埼玉県上尾市緑丘1-11-5-302 TEL: 048-771-7958
西島 安則 : 〒610-1197 京都府京都市西京区大枝沓掛町13-6京都市立芸術大学
TEL: 075-332-0701 FAX: 075-332-0709
二谷 貞夫 : 〒943-0847 新潟県上越市南新町1-10-302
野崎 志帆 : 〒563-0047 大阪府池田市室町11-22-A-101 TEL・FAX: 0727-52-3844
牧 昌晃 : 〒157-0061 東京都世田谷区北鳥山8-26-3 TEL: 03-3300-7380
福沢 郁文 : 〒160-0014 東京都新宿区内藤町1御苑ハイツ507 TEL: 03-3352-5768
藤井 誠 : 〒102-0072 東京都千代田区飯田橋2-4-11パレ・ドール九段下404
TEL: 03-3265-5-54 FAX: 03-3265-5055
松井 美帆 : 〒216-0003 神奈川県川崎市宮前区有馬4-3-16-306
大山 大光 : 〒271-0064 千葉県松戸市上本郷3044-3ライオンズマンション北松戸804
八重沢 勇一 : 〒242-0005 神奈川県大和市西鶴間3-6-1-1018 TEL: 0462-63-9113

◆平成11年度より会費値上げ

平成10年度の総会において、平成11年度より次のように会費の値上げが承認されました。なお、学生会員及び団体会員は据え置きです。

正会員 8,000円

入会金 3,000円

既に平成11年度以降の会費を納入されている会員は、4月に差額3,000円を納入してください。

◆会員名簿刊行について

昨年10月に会員名簿を作成致しましたが、その後会員の移動が多数ありましたので、理事会に諮り承認されましたら再度刊行する予定にしています。つきましては、お手元にある会員名簿の連絡先が異なっている場合は事務局までFAXにてご連絡下さい。また今後、自宅連絡先並びに勤務先や所属部署が変更・追加される場合も必ず書面にて（FAX可）事務局までお知らせ下さい。（連絡先 03-5983-8132）

事務局からの連絡

◆事務局の移転

日本国際理解教育学会事務局は、既にご連宅してありますように平成9年度までは日本国際交流振興会にありましたが、平成10年度より下記に移転しましたので、再度新住所及び電話番号・FAX番号を再度お知らせします。

〒161-8539 東京都新宿区中落合4-31-1

目白学園女子短期大学内 日本国際理解教育学会事務局（担当：中西 晃、土屋洋子）

電話・FAX番号 03-5983-8132

事務局への電話連絡は中西または土屋がでるようになっておりますが、不在のときは留守電に用件と連絡先を入れておいてください。後程ご連絡いたします。また、会員が資料等をご利用できるようにいたしてありますので、どうぞご遠慮なくご利用ください。これにともない、会費等の納入先も次のように変更になりました。

- ・郵便振り込み 口座番号 00120-5-601555（従来通り）
加入者名 日本国際理解教育学会
- ・銀行振り込み 富士銀行 中井支店（249） 普通預金
口座番号 1783886
名義人 日本国際理解教育学会

◆年会費納入のお知らせ

当学会の活動のすべては会員の皆様の会費でまかなわれております。会費納入状況は必ずしも良くないので、学会の活動に支障が生じております。なにとぞこの事情をご賢察の上、年会費未納の会員は早急に平成10年度までの会費をお支払いくださるよう宜しくお願い致します。

平成10年度までの会費： 正会員：5,000円 学生会員：3,000円 団体会員：30,000円

平成11年度以降の会費： 正会員：8,000円 学生会員：3,000円 団体会員：30,000円